

ニーチェから日蓮へ

(樗牛の場合)

——前篇——

中 村 憲 治

序

高山樗牛は、明治四年（1871年）一月十日に生まれ、明治三十五年（1902年）十二月二十四日に没した。三十二年間にも満たない生涯であった。しかしながらその著作は数多く、また時代に与えた影響も大きかった。当時の日本は、あらゆる分野で西洋の模倣、或は輸入が行われていた。それは思想界でも例外ではなかった。明治初年、日本の思想界に取り入れられた西洋思想は、英・米・仏の功利主義、自由主義であった（文久三年、独逸人の商人ボエディングハウス《通称ボーデンハウス》によってカントの人間学の第一版が長崎の地にもたらされた^①という史実があるそうだが、これは殆どその影響を考える必要はなさそうである。）が、明治十一年フェノロサが渡来してからは、独逸思想も盛に取り入れられるようになった。（だが、英吉利経験論の哲学を圧倒して独逸哲学が盛んに摂取されるに至ったのは、明治二十年代の末頃であろう^②と言われている。）そして、明治以前の思想も、勿論脈々と生きていた。いわば、いくつもの思想が混じり合い、ぶつかり合う、激動の時代だったと言えるだろう。その時代の真直中を流星の如く生きたのが樗牛であった。その樗牛の思索の跡を辿っていて、最も私の興味をひいたのが、ニーチェ主義から日蓮主義への移行ということであった。樗牛は日本において最も早い時期におけるニーチェ主義者、或は、ニーチェを紹介した人の一人と言われている。そればかりか樗牛はホイットマン、ゲーテ、ハイネ、ワーズワース等々、数多くの西洋の作家や

詩人等について言及し、紹介し、その作品を翻訳し、批評を加えている。いってみれば当時の時代の最先端を行く文化人の観さえある。その樗牛が突然の様に、日蓮讃美を始めたのである。これは、元来樗牛は矛盾の多い人間であった^③らしいが、その矛盾のなせる業だったのか、或は樗牛の思想の流れの中での当然の帰結だったのか、それとも、そのどちらでもない突然の思想的な飛翔とでもいうべきものであったのか、興味は尽きない。この試論は、そこの所を探って行くことを主眼としている。従って、ここでは樗牛の伝記的側面や、ニーチェ主義以前の思想の跡についての言及は、必要最低限度に留めたことを、お断わりしておきたい。

序の最後に、これまでの樗牛研究について簡単に述べてみたい。樗牛研究には、伝記的研究と、部分的研究（樗牛とニーチェとか、樗牛と日蓮、或は樗牛と日本主義というような）がある。前者に属する研究を二、三紹介すると、「高山樗牛——その生涯と思想」（秋山正香、昭和三十二、十一、積文館）、「樗牛伝」（齊藤親平、大正五、二～大正八、三、人文）、等がある。この他にも小野寺凡氏のように地道な伝記的研究をしている人はいるが、手に入る出版物の数は、余り多くはないようである。次に後者に属する研究を若干紹介するが、こちらの方は数多い。「主我主義の主張——高山樗牛とニーチェ」（吉田精一、昭和三十、十一、東京堂）、「ニーチェと日本文学」（長谷川泉、昭和三十八、二、至文堂）、「樗牛とニーチェ——『美的生活論』を中心として」（重松泰雄、昭和二十八、六、文芸研究）、等々である。この他にも一葉、天心、鷗外らと樗牛を論じたもの、日蓮と樗牛を論じたものなど、数は多い。しかしながら現在では、樗牛は滅多に論ぜられなくなっている。これは、ファシズムの宣伝に利用されたことが影響しているのかも知れないが、私には不当なことと、思われる。何故なら、樗牛はファシストでも国粹主義者でもないからである。これはニーチェがナチスに不当に利用されたことと、よく似ている。いづれにせよ、日本の思想界における樗牛の思索の跡を再検証することは、決して無意味なこととは思われない。私のこのささやかな試論が、どれだけの意味を持ち得るか

については、ひどく心もとなく思っている次第ではあるのだが。

ニーチェとの出会い以前

樗牛がニーチェを知ったのは、長谷川義記氏によると^④ 明治三十一年一月に井上哲次郎の講演をきいてからだという。しかし、明治二十八—九年、ケーブルの口からニーチェの名が東京帝国大学の学生たち——桑木嚴翼、姉崎嘲風、登張竹風、高山樗牛等々——に伝えられた^⑤ との説もある。どちらが真実なのか私には分らないし、今それは本題ではない。ここでは樗牛は、明治三十年前後にニーチェを知ったということで充分であろう。

樗牛はニーチェを知って、強くひかれた。明治三十四年十一月十五日付の姉崎嘲風宛書簡の中で樗牛は「…吾れは又ニーチェの思想に先天の契合あるを覚えぬるは如何にぞや。」^⑥と書いている。この「先天の契合」について考える前に、樗牛の文学的姿勢に触れておかなくてはならない。それが「先天の契合」について考えるヒントになると思うからである。

明治三十四年八月鎌倉で書いた「感慨一束」の中で樗牛は、軽々しくトルストイやゴリーキーを註釈し、讚美する日本の当時の文芸界について言及し、「等しき者のみ等しき者を解し得べし。」^⑦とっている。これは翌年の三月に書いた「静思録」中の言葉「大いなる誘惑と大いなる懷疑とに打勝った信仰でなければ兎ても一代の人心を指導することが出来ない。」^⑧とも符合するだろう。つまり樗牛は、個人の精神の深さや大きさについて言っているのである。軽佻浮薄な輩が、トルストイやゴリーキーを讚美し、得意気な顔をしているのを樗牛は苦々しく思うのである。個人としてトルストイと同じ位悩み苦しんだ者でなければ、その文学を解せるはずがない、というのである。誘惑に負けそうになったり、懷疑の迷路に踏み込んだ者達を求い導くことができるのは、それらを乗り越えた者でなければできない、というのである。権力争いにうつつを抜かしている僧侶達に、人心を求い導くことなど、できるわけがない、というのだ。自ら痛みを知っている者でなければ、他人の痛みなど分るわけがない、ということだろう。自ら痛

みを知る者は、他人には優しいものである。それに対して、他人に厳しく、自分に甘く、というのは、最も怠惰で、最も楽な生き方であろう。そして思慮浅き人の最も陥り易い所でもであろう。正にその対極を樗牛は主張しているのだ。そして、よく分りもしないのに分ったような素振りをすることを樗牛は他人にも自分にも許さない。過去から現代に至るまで、大いなる評価を受けている「源氏物語」に対する樗牛の論評に、それはよく表われている。「……吾は源氏を好まず、却てそを古今の大悪文の一つに数へたく思ふ也。」⁹まず名文と云へば世の人々は源氏物語というので、幾度も手にとって読んでみたが、面白くもなんともなく、根気が続かなくなり、いやになってうち捨ててしまった、という。自分の心に感ずる所のない文章は、世の中の人すべてが名文だ、名文だといっても、自分は悪文だ、悪文だと罵言する、と居直っている。要するに樗牛は、自分の心に訴えかけてくる文章以外は、認めないのである。これが樗牛の一貫した姿勢の一側面である。つまり実体験（精神的体験も含めた）に裏打ちされた自らの心に忠実であろうとする姿勢である。その現れが、「源氏物語」への批判であるのだが、それとは逆に樗牛は、「平家物語」と日蓮の文章を高く評価するのである。殊に日蓮の文章に対しては「上人の文は文に非ずして精神也。」¹⁰とまでいっている。麗々しく装飾された文章を樗牛は好まない。飾り気のない、文章の裏から精神が現われてくるような迫力のある文章を樗牛は好むのである。日蓮の文章にひかれる以前には、ニーチェの文章が正にそれであったのである。だがニーチェと出会う前に樗牛には、類似した出会いがあった。それは、ホイットマンとの出会いであった。

明治三十一年五月、「ワルト・ホイットマンを論ず」の中で樗牛は、「實在の人生は決して自然に離れ得べきものにあらず、是れホイットマンが人生に関して有せる根本の思想なり。……肉の外に靈なく、靈の外に肉無し。」¹¹と言っている。現世にこそ人生がある。そして精神と肉体は切っても切れないものである。つまり肉体と精神は同等に貴いということである。ホイットマンのそうした主張に樗牛は大いに共感する。そして「されどホイット

マンは、吾等を以て見れば徒に肉欲の快樂を重じたる浅薄なる詩人に非ず。……人體を唱ひ生殖を唱へたるのみならず、又一切物象に精靈あることを歌ひ、男も女も、飲食も、呼吸も、是の精靈の円満なる發達に欠くべからざることを歌いたり。」^⑫と続けている。そして更に「……人生を以て『永遠なる旅行』となすも、彼の心は常に個人てふことを離れず。…曰く万物は個人の為に存す、……」^⑬ホイットマンは肉欲だけを重ずる浅薄な詩人ではない。あらゆるものに（生殖、肉体、男女、飲食、呼吸等）精靈が宿っており、また精靈の發達に、これらは欠かせない、ということを歌っているのだ。そしてホイットマンは常に個人に重きを置いている。万物は個人の為にある、といている。と、樗牛はいうのである。そして、「彼の声は……意志の声なり、而かも最も健康に最も體力ある人の口より出づる意志の声なり。彼は一度びも泣かず、悲まず、恨まず、常に笑ひ、樂み、踊る。……」^⑭ホイットマンの声、すなわち詩句は、健康的で活々として、力強い、そして笑ひ、樂み、踊る意志そのものだ、と樗牛はいうのである。これは樗牛の現世肯定の言葉と受け取ることができるだろう。あの世に（いいかえれば浄土に）希望を托すのではなく、この世の生に、人生に、最大の価値を置く。そして個が最も重要なのである。この現世肯定の個人主義に、樗牛は共鳴する。これが樗牛の姿勢のもう一つの側面だと思われる。この樗牛の個人主義的信念は、日本主義時代の樗牛にも保持されている。「個人を離れて別に国家無く、……」^⑮と樗牛はいつているのである。つまり、個人の為に国家があるのであって、国家の為に個人があるのではない、というのである。このような思考は、樗牛には以前からあった。「……所詮国家は人類生存の目的即ち人生の幸福を大に円満に実現せんが為に建立せられたる者なり。別に個人を離れ、初より国家なる形式ありて、吾人の自由なる活動を拘束したるに非ず。」^⑯と既に明治三十年七月に樗牛はいつているのである。こうみえてくと、樗牛の日本主義に関する発言は、秋山正香氏の指摘するように、「大半は、恩師井上哲次郎博士への援護射撃」^⑰でしかなかったような気がする。明治三十年五月に書いた樗牛の「日本主義」を読むと、樗牛

らしくないもって回った言い方や、苦しげなこじつけが眼に付く。樗牛の文章はその殆どが竹を割ったように分りやすく、痛快なのだが、「日本主義」に関する文章は、妙に分り難く、奥歯に物がはさまったような印象を受ける。相当無理をして書いた文章なのでは、なかろうか。私には、樗牛の「日本主義」は、井上哲次郎らの「日本主義」とは、同一のものとは、思えないのである。この時代の樗牛にとって、最も重要なのは、やはり個人であったと、私には思われる。樗牛自身後に「ドーモ日本主義時代の思想が、僕の本然の皮相なる部分の発表に過ぎなかったことが今から思はれる」^⑧と述懐しているのである。これは樗牛の人間的な弱さの表れだと私は思う。日本主義時代の樗牛は、義理、人情にいまだしぼられていたのであろう。「日本主義」を書いた二ヶ月後の前述の発言^⑨は、自らの弱さを克服せんが為の発言ともとれるだろう。更にその後のニーチェや日蓮との出会いによって、樗牛はこの弱さを克服していったと私には思われる。しかしながらこの時代の樗牛の発言が、後にファシスト達に利用されてしまったことも事実である。だが、この部分を拡大解釈するのは、樗牛の本質から外れていると、私は思う。「日本主義」に関する発言も、樗牛の著作群の中の、ごく一部とのみとらえておけば、充分だと、私は思うのである。

さて、話を元に戻そう。樗牛の文学的姿勢は、これでかなりはっきりしてきたと思う。つまり、実体験（精神的体験も含めた）に裏打ちされた自らの心に忠実であろうとする側面と、現世肯定的個人主義的側面を持った姿勢がそれである。前者の方は実体験が増すわけだから、心にも変化が起るのは当然であるし、樗牛自身その変化を素直に受け入れている。パイロンに対する評価の逆転なども、そのよい例であろう。だが、後者は終生あまり変らなかつたように思う。特に現世肯定的ということに関しては、一貫していたように思う。キリスト教や当時の仏教界に対する批判も、主にあの世とか、浄土に最高の価値を置くということへの批判だったからである。

ニーチェとの出会い

さて、ここで少し明治時代の思想界に眼を転じてみよう。日本に最初に輸入された哲学が、英・米・仏流の哲学であったことは、既に述べた。そして、明治十一年、米人でハーバート大学出身のフェノロサが招聘され、哲学（政治学、経済学も講じた）を講じたわけだが、彼はヘーゲル哲学に心酔していたために、ヘーゲルやカントを説いたという。次いで、英国人クーパー（Cooper）が招かれて^⑨カントを講じた。そして明治十九年以降、独逸人ブッセ、ケーベルらが招かれ、いよいよ独逸哲学の研究が本格的になるのである。そして、ヘーゲル、カント、ショーペンハウエルなどの研究が盛に行われるようになる。そして、それに呼応するように、明治二十年二月「哲学会雑誌」（明治二十五年以降は「哲学雑誌」に改称）が発刊された。その中心になったのは、井上円了、井上哲次郎、有賀長雄、三宅雪嶺、棚橋一郎、加藤弘之、西周、西村茂樹、中村正直、原担山等、荘々たるメンバーであった。そして、このような時代のただ中の明治二十六年九月、樗牛は東京帝国大学文科哲学科に入学した。同級生には、桑木嚴翼、笹川臨風、そして生涯の友となった姉崎嘲風らがいた。そして明治二十六年というと、ケーベルがブッセに代って来日した年でもあった。ケーベルの日本の哲学界への貢献は、甚だ大きい。そのケーベルの教を樗牛も受けたのである。恐らく樗牛はケーベルを介してカントやショーペンハウエル等々に触れたものと思われる。中でも、ショーペンハウエルにはかなりひかれたらしく、後に「ショーペンハウエルの如き英雄豪傑は最早や此世に出づる能はざる乎。」^⑩などといっている。そして更に「世に凡人の数幾十百千万億ありとするも、人類に於て何の益する所ぞ。願はくは彼等の十万を割いて一パイロンを得む。」^⑪と述べている。天才の出現の為なら、多くの凡人の犠牲も惜しくはない、ということである。更に続けて、日蓮の為なら一千万を、そして釈迦の為なら一億を、と述べている。この文章から樗牛の過去の天才たちに対するランク付けが見られて仲々面白い。この文章は明治三十四年十一月に書かれたものだが、既にこの頃樗牛の中には日蓮主

義の芽生えがあったようである。そのことはさて置き、樗牛がニーチェを知った時期は、はっきり分らないが、ニーチェについて本格的に論評を始めるのは、明治三十四年頃からである。この頃の樗牛は、結核療養をかねて、大磯に住んでいた。そして三十四年一月「文明批評家としての文学者」を『太陽』に発表する。そこでまず樗牛は、ニーチェのことは話しに聞いていたが、仲々読む暇がなく残念に思っていたが、やっと二、三冊の著書を読んだ、と述べている。従ってこの時点ではまだそれ程多くはニーチェの著書を読んではいないと、思われるのだが、かなり鋭い観察力を示している。「……彼は哲学者と謂はむよりは寧ろ大なる詩人也。而して詩人として大なる所以は、実に彼が大なる文明批評家 Kulturkritiker たる所に存す。」^②と樗牛は指摘する。確かにニーチェは、ヘーゲルやカントの如く、自らの思想を体系化した哲学者とは趣きが異なる。激めば水も腐るとニーチェはいう。体系化してしまえば中身は形骸化してしまう、というのである。そのニーチェの得意とする表現方法はアフォリズムであり、詩でもあると、いえるだろう。そしてそこには、様々なものへの否定的批判が散りばめられているのである。ニーチェを大なる文明批評家的詩人とした指摘は、的を得ている。そして樗牛は「……彼の歌へるものは山に非ず、河に非ず、恐らくは彼自らも解する能はざりし天地人生の幽微也。……唯靈なるもののみ能く靈を動かす。」^②と述べている。ニーチェは永遠回帰思想が、自らの内より発生したのではなく、ある時突然むこうからやってきたと、述べている。つまり、論理の積み重ねによって獲得したという類の思想ではなく、不思議な力によって与えられた思想だというのである。閃きなら、凡人である我々にもたまにはあるものであろうが、これはそんなものよりも遙かに次元の高いことのようなのである。「靈なるもののみ能く靈を動かす」という樗牛の言葉は、そのの所を察しているのかも知れない。だとすれば、驚くべき慧眼である。更に樗牛は、ニーチェには「……己れの信ずる所を貫徹せむが為には遙ち一世を敵として戦ふを辞せざるの気魄あり。」^②と述べている。樗牛はニーチェの思想だけではなく、ニーチェ本人をもみて

いるのである。これは樗牛の大きな特長である。樗牛は常に文章をとおして、それを書いた人間をもみるのである。そしてその人間の生き方に共感できるか否かが、樗牛にとっては大きな問題だったようである。そして樗牛がその文章から垣間見たニーチェの生き方は、大いに共感できるものだったのである。樗牛は級友桑木巖翼のニーチェ批判に対して、「…吾等の関はるところは説に非ずして人也。桑木君何ぞ其の所謂の倫理説より一步乃至百歩を進めてニーチェ其の人を解説することを為さざるや。…」^⑧と反論している。樗牛にとって、…説など、第一の問題ではない。世の善悪の基準も、永く世間に信ぜられてきた定説も問題ではない。そのようなものにより所を求めた説の展開は、樗牛の眼には空々しく映る。ニーチェは、真理は虚偽であるといった。人類は嘗々として虚偽を積み重ねてきた。言葉自体が虚偽なのである。例えば、「葉」という言葉がある。だが、どこにも「葉」そのものなどありはしない。あるのは一葉一葉微妙に異った葉ではないか。そうした言葉（即ち虚偽）の積み重ねは、虚偽以外の何ものでもない。樗牛もそれを直観的に感じているようなふしがある。「真理は人生の最も低廉なる低価のみ、窮すれば已むなく真理に行く、??」^⑨などと手帳に書いているのである。

樗牛は常に作品の奥に、その作品を書いた人間をとらえる。そして樗牛はニーチェに天才を覩た。個としての天才を覩たのである。ニーチェの文章からは、誰の助けも借りない、ニーチェ自身の肉声が聞こえてくる。人はしばしば既成の権威の力を借りて、自説を正当化しようとする。そればかりか、自説といえるものなど、かけられない場合さえある。だがニーチェは自分自身の言葉で語る。そして既成の権威の力を借りる所か、それらをことごとく否定してみせる。その結果、どのような反発を受けようと、また多くの敵を作ろうと、ニーチェはそれを甘んじて受ける覚悟を持っている。樗牛はそれを見抜いた。そしていよいよニーチェにのめり込んで行くのである。

注

- ① 「明治維新と独逸思想」大塚三七雄著 昭和52年5月3日 長崎出版
149ページ
- ② 同上 29ページ
- ③ 「樗牛全集」高山林次郎著 明治36年 博文館 第2巻 860ページ
- ④ 「樗牛—青春夢残 高山林次郎評伝」長谷川義記著 1982年11月 暁
書房 89ページ
- ⑤ 「日本人のニーチェ研究譜」ニーチェ全集別巻 1982年9月 白水社
516ページ
- ⑥ 「樗牛全集」第5巻 423ページ
- ⑦ 同上 第4巻 976ページ
- ⑧ 同上 1037ページ
- ⑨ 同上 950ページ
- ⑩ 同上 955ページ
- ⑪ 同上 第2巻 589ページ
- ⑫ 同上 591ページ
- ⑬ 同上 593ページ
- ⑭ 同上 599ページ
- ⑮ 同上 第4巻 451ページ
- ⑯ 同上 280~281ページ
- ⑰ 「高山樗牛—その生涯と思想」秋山正香著 昭和32年11月 積文館
142ページ
- ⑱ 「樗牛全集」第5巻 400ページ
- ⑲ 前出「明治維新と独逸思想」 164ページ
- ⑳ 同上 第4巻 1005ページ
- ㉑ 同上 1005ページ
- ㉒ 同上 第2巻 824ページ
- ㉓ 同上 827ページ

ニーチェから日蓮へ〈樗牛の場合〉

- ⑭ 同上 833ページ
- ⑮ 同上 987ページ
- ⑯ 同上 第5巻 272ページ